

論 文

小学校教員養成課程のピアノ実技指導における一考察 — 個別指導によるピアノ実技指導法と、学生の学習意欲向上を目指して —

Practical Piano Instruction for Teacher Training Colleges:

Improving Practical Piano Skills through Individualized Tutoring and Increased Student Motivation

竹内 彩佳¹⁾・高久 新吾²⁾†

要 約

ピアノ実技は学生それぞれの個性によって指導法が異なるため、一人ひとりに合った指導を行うことで学習意欲を失うことなく上達することが可能である。保育・幼稚園現場や小学校現場において、ピアノ実技はどの程度必要であるか、また教員養成大学におけるピアノ実技指導方法のあり方について、学生からのアンケートをもとに適切な指導法を調査・考察していく。

キーワード：音楽教育、ピアノ指導、ピアノ実技、個別指導

1. はじめに

現在、教育現場において保育士・幼稚園教諭、小学校教諭の不足が社会的問題になっている。保育現場においては、原因の1つとして残業など勤務時間の長さや賃金の低さなどが挙げられており、離職率も高く、厚生労働省による2021年の統計データでは9.3%^[1]である。特に私立保育園の保育士における離職率は10.7%と公立保育園よりも高い結果となっているほか、入職してから50%もの人が5年以内に離職していることも報告されている。

また、小中学校教員においては全国で2,000人以上の不足が生じており、新学期に学級担任がいらないという学校においては学級担任を代替として対応している学校もあるのが現状である。その理由として、授業だけでなく、部活顧問などの業務が多いことや、待遇や勤務条件が良くないといった声が挙げられている。教

員不足の定義は、臨時的任用教員等の講師の確保ができず、実際に学校に配置されている教員の数が各都道府県・指定都市等の教育委員会において学校に配置することとしている教員の数（配当数）を満たしておらず、欠員が生じる状態を指す^[2]とされている。それらを解消するための対策として、元教員の退職者を採用する他、民間企業からの教員採用、年齢制限の撤廃、スポーツ選手や芸術家といった専門性を持った人を募集したり、大学4年次での採用試験を3年次に受けることを可能とし、採用試験の前倒しを進めている自治体も増加している。また、普通免許状を持つ人を採用できない場合、各都道府県の教育委員会が交付する臨時免許の活用といった対策も目立っており、さらには2022年7月1日より教員免許更新制の廃止がなされるなど、さまざまな対策がなされている。

保育士においても、人材育成や再就職支援等を強力に進めるための「保育士確保プラン」を策定し、人材育成、就業継続支援、再就職支援、働く職場の環境改善の4つの柱^[3]を軸に増員を目指している。

†責任著者

¹⁾ 美作大学生活科学部児童学科非常勤講師

²⁾ 美作大学生活科学部児童学科教授

このような現状の中、教員不足解消に進められている対策は先述のとおりだが、果たしてこれらの対応は教育現場において望ましいものなのであろうか。本来担当するはずではない教科の授業を受け持たざるをえない状況や、免許を取得しやすくするということは、教員の質の低下にも繋がりがかねない。また、教員不足による業務負担が長いほど生徒と向き合う時間が減り、さまざまな問題への対応が十分にできないといった悪循環さえも生まれるであろう。

本論では、このような教員志望者減少による教育の質の低下による教育不足が、将来を担う子どもの学力低下や、現在課題とされている日本の研究・教育力の低下について着目した。とりわけ音楽教育、特にピアノ実技指導の実態について調査し、解決策を考察していく。

2. 先行・関連研究

先行・関連研究を概観すると、教員養成課程のピアノ指導に関する研究が以下に挙げられる。

井上（2023）は、初等教員養成課程の授業で弾き歌いを課す際、初心者に短時間でピアノ技術を習得させる指導の工夫について考察している。受講生を対象に、ピアノ演奏において苦手だと感じることや、視覚と聴覚のどちらに頼っているかを調査するアンケートを実施し、受講生がピアノを弾く際どのように音を捉え、何に困難を抱えているかについて検証した。その上で、視覚的・聴覚的な音の捉え方と運指における指の幅を感覚として意識させるトレーニングを組み合わせる指導法を実践した効果について論述している。^[4]

篠原（2021）は、ピアノ学習の経験のない学生がピアノ演奏に対して苦手意識を持つ要因には、楽譜が読めない、譜読みに時間がかかる、といった「読譜力」に関することや、鍵盤の位置が曖昧、鍵盤のどこが何の音なのか瞬時に把握できない、といった「楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせる能力」に関する部分が不足していることを挙げている。このような学生のピアノ演奏に対する根本的な苦手意識を克服するために、担当している「小専音楽」授業内で効率よく読譜

力等を習得・向上させるための教材の制作を試みた。またピアノを練習する実践の段階では、学生自身が演奏能力や鍵盤認知能力の向上を実感できたことを明らかにしている。^[5]

長谷川（2023）は、音楽科授業で必要とされる弾き歌いの技能について、指づかいが原因となるつまずきに着目した。小学校歌唱共通教材の簡易伴奏譜を用いて旋律の指づかいを分析し、実際の教育現場で活用できるための指導について考察している。また、より豊かな音楽表現のためには、音楽の授業に必要な基礎的な音楽理論の知識を切り離して考えずに、曲の中でも関連させながら弾き歌いに取り組むことの必要性についても言及している。^[6]

竹内（2016）は、教育現場で子どもと関わる時、音楽の楽しさを教えるためにはピアノを使って授業展開できることが必要であると論述している。教員養成課程において、学生のピアノ学習経験にはかなりの個人差が見られ、初歩の段階から誤った解釈で演奏する者が多い。見落とされているいくつかの問題点とその取り組み方をいくつかの曲から考察し譜面の正確さを読み取ることと、加えて練習と精神力とが学習に意欲的な取り組む姿勢に影響を及ぼすと結論付けている。^[7]

高久（2011）は、日本とヨーロッパの音楽教育を比較し、特にフランスとフィンランドの小学校音楽教育に着目している。専科制であるこの2国に対し、日本の小学校授業は全科制であり、その中で音楽の授業はピアノ演奏など苦手意識が高い教員が多いことを指摘している。今後、音楽授業は専科制度にすることにより音楽教育の質の向上をはかることができ、専科制度の導入を見据えておくことが必要と論じている。^[8]

本研究はピアノの個別実技指導法に着目し、教員養成大学におけるピアノ実技指導方法のあり方について、学生からのアンケートをもとに適切な指導法を調査・考察していく。

3. 教育現場の現状について

3.1 ピアノの実技の必要性と教員養成大学における教育

保育・幼稚園現場や小学校現場において、音楽の授業を行う際には伴奏が必要である。伴奏形態の指定は特にはないが、日本の音楽教育において歌唱などの伴奏形態はピアノが主流であるため、採用試験においてピアノの実技試験が実施されやすい傾向にある。その理由として①音がすでに作られており扱いやすい②音を構成する様々な要素を説明するにあたり利便性に優れている③音色や強弱など多彩な表現力を持ち1台で旋律も伴奏もできる、というように幅広い用途に対応できる点^[9]が上げられる。

実際に教員用の小学校教科書指導書には「伴奏編」があり、伴奏編での編曲は曲によってはオリジナルの伴奏である「本格伴奏」と、ピアノが得意でない教員用の「簡易伴奏」が存在する。簡易伴奏は本格伴奏と比較すると簡単であることは無論であるが、伴奏表現においての効果は低い。そのため、ピアノが得意でない教員は簡易伴奏を選択しないでCDによる本格伴奏を好む傾向にあることは否めない。指導書の中には本格伴奏が収録されているCDがあるため、どちらの選択肢も間違いではないが、教員による生の演奏でないため、考え方に賛否両論存在するのも事実である。

教員養成大学においては、伴奏法の習得のため、ピアノ実技の授業が開講されている。主に個人レッスンを行い、学生それぞれに合った個別指導を行っている大学が多いが、学生数が多い、または教員数が少ない大学ではグループレッスン形態で授業が行われているところもある。ピアノ実技のレベルは初心者、経験者と様々であるが、将来現場で必要となってくる演奏技術を大学在学中にある程度習得していかなければならない。教員養成大学におけるピアノ実技の授業において、演奏技術はすぐに得られるものではなく、地道な積み重ねを強いられるため、初心者の学生にとっては時間をかけて習得していくことが必要となってくる科目である。

3.2 教員採用試験におけるピアノ実技試験内容

これまで保育士・幼稚園教諭、また小学校教員採用試験では、多くの自治体で一次試験に筆記、二次試験に実技、面接の試験が行われてきた。しかし現在、採用試験において音楽の実技試験は多くの自治体において廃止されている。例えば、平成27年度は46/68の自治体が実施していた年に対して、令和3年度の採用試験においては16の自治体のみにもまで減少している^[10]。さらに、音楽の実技試験だけではなく、体育の実技試験も廃止されており、コロナ禍で感染拡大を避けるために廃止になったという理由^[11]も挙げられているが、実技試験を廃止することで受験しやすくなるといったという全国的な教員不足の解消への対策とも捉えられる。令和2年度においては、受験者の負担を軽減するために実技試験を廃止し、その代わりに初任者研修で音楽教科の研修を図った自治体もある他、小学校の試験内容が他の校種・職種に比べて多く、二次試験の受験日程の多さが課題となっていたため、試験内容の精選の観点から実施の見直しを行ったという理由も見受けられる。また、免許取得の段階で実技の担保ができていたという考えも後押ししているが、教員養成大学においてピアノ実技の授業は1年間のみ必修科目とされているだけで、それ以降は選択科目に設置されている。

4. 研究目的と方法

4.1 研究の目的

1で述べた教員不足への対策や実技試験の廃止などは、教員不足の解消に繋がるかもしれないが、それによる教員の質の低下や児童に対する教育への影響に関わってくるものである。保育現場においても情操教育である音楽は、子どもの情緒を育てるためになくてはならない教育である。

実際、保育園・幼稚園現場、または小学校現場において、採用試験時にピアノ実技が廃止されていることへの違和感や不安、またピアノ実技はどのくらい必要であるかを図るために学生に対してアンケート調査を行った。

4.2 調査方法

A大学児童学科の学生2年生～4年生にアンケート用紙を配布し、ピアノ実技の授業を履修した上での回答を得た。1年次の授業を経て、2年次の授業で変化があったかどうかを知るため、それぞれに以下の項目を設定した。

<1年次のピアノの授業に関する質問内容>

- ①大学入学前にピアノを習っていたか。
- ②どのくらいの期間習っていたか。
- ③どんな曲を弾いてきたか（記述）
- ④授業を履修した理由（記述）
- ⑤授業に意欲的に取り組むことができたか。
- ⑥授業を受けるための1日の練習時間はどのくらいだったか。
- ⑦難易度はどうだったか。
- ⑧楽譜を読めるようになったか。
- ⑨個人レッスンでのアドバイスは理解できたか。
- ⑩ピアノを弾くことへの苦手意識は変わったか。
- ⑪ピアノの授業を履修してよかったか。

<2年次のピアノの授業に関する質問内容>

- ⑫ピアノの授業を履修した理由（記述）
- ⑬授業に意欲的に取り組むことができたか。
- ⑭授業を受けるための1日の練習時間はどのくらいだったか。
- ⑮難易度はどうだったか。
- ⑯楽譜を読めるようになったか。
- ⑰個人レッスンでのアドバイスは理解できたか。
- ⑱ピアノを弾くことへの苦手意識は変わったか。
- ⑲弾き歌いは得意になったか。
- ⑳ピアノの授業を履修してよかったか。

<全員に向けての質問>

- ㉑保育園・幼稚園または小学校教員になった場合、ピアノ伴奏の代わりにCDを使うことも可能ですが、あなたはそれを使用して授業を行いたいと思いますか。（選択・記述）
- ㉒保育園・幼稚園での教育・保育、または小学校の授業をする際に、ピアノの実技は必要だと思いますか。（選択・記述）

㉓採用試験でピアノ実技の試験はある方が良いと思いますか。（選択・記述）

なお、調査においては研究の目的以外には使用しないこと、無記名であることを記載し、研究内容に同意した学生を対象に実施した。

5. 結果

アンケートは計96通の回答を得られた。5段階リッカートスケール方式で回答してもらい、自由記述の欄も設けた。1年次におけるピアノの授業の履修者はほぼ全員で、2年次においては96人中15人が授業を履修しなかったとの回答が得られた。

以下、結果を示す。

5.1 1年次のピアノ実技の授業を履修しての結果

- ①大学入学前にピアノを習っていたか
はい：51名 いいえ：45名
 - ②どのくらいの期間習っていましたか
1年未満：8名 1年～2年：8名
2年～3年：1名 3年以上：34名
 - ③どんな曲に取り組んできましたか。
ブルグミュラー、パッヘルベルのカノン、ショパン、ジブリ曲、J-popの曲、バイエル、エリーゼのために、ハノン、ソナチネ、ギロック、湯山昭、シベリウス、バッハ、モーツァルト、ソナタ、ショパン「華麗なる大円舞曲」「幻想即興曲」、ディズニーの曲等
- 質問⑤～⑪の結果を表1に示す。

5.2 2年次のピアノ実技の授業を履修しての結果 <ピアノ伴奏のCDを使用して授業を行いたいと思いますか。>

使いたい：67名 使いたくない：26名
無回答：3名

大半の学生がピアノの授業を履修しており、アンケート結果からも授業における理解度は高いとみられるが、それであってもCDに収録されている伴奏を使って指導をしたいという回答が多く得られた。その

表1 アンケート調査結果【1年次】
Table1 Questionnaire survey results [1st year students]

	-2	-1	0	1	2
ピアノの授業に意欲的	意欲的でない	あまり意欲的でない	普通	意欲的だった	とても意欲的だった
	1	6	8	45	36
ピアノの授業練習時間	10分以下	20分	30分	40分	それ以上
	13	17	32	13	20
ピアノの難易度	とても難しい	難しい	普通	易しい	とても易しい
	16	28	40	8	4
楽譜を読めるようになったか	そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う
	4	8	15	40	29
ピアノ授業理解度	理解できなかった	あまり理解できなかった	どちらともいえない	理解できた	よく理解できた
	3	2	3	51	37
ピアノの苦手意識の変化	変わらなかった	あまり変わらなかった	どちらともいえない	変わった	とても変わった
	8	10	34	38	6
ピアノ授業の満足度	満足ではない	あまり満足ではない	どちらともいえない	満足	とても満足
	1	4	6	23	62

えたら便利だから。でも基本的にはピアノを弾いて、子どもたちと関わっていきいたい」といった回答があった。反対に、CDを使いたいとは思わないと回答した学生も約3割存在した。その理由として「耳が発達する時期に生の音を聴かせた方が良いと思うから」「その時の気分によって転調したり、音の強弱やスピードを変えて弾くことができ、子どものペースに合わせてテンポを変えたりできるから」「子どもたちに生で音を聴いてもらうことで、より音楽に興味を持てると思うから」「先生が一生懸命ピアノを弾いているほうがカッコ良いから」といった回答があり、現場の雰囲気に合わせて、臨機応変に対応できることが必要であると感じている様子がわかる。

＜授業をする際にピアノの実技は必要だと思いますか＞

必要だと思う：64名 必要だとは思わない：30名
無回答：2名

表2 アンケート調査結果【2年次】
Table2 Questionnaire survey results [2nd year students]

	-2	-1	0	1	2
ピアノの授業に意欲的	意欲的でない	あまり意欲的でない	普通	意欲的だった	とても意欲的だった
	5	7	7	37	25
ピアノの授業練習時間	10分以下	20分	30分	40分	それ以上
	14	14	26	10	16
ピアノの難易度	とても難しい	難しい	普通	易しい	とても易しい
	16	29	27	6	2
楽譜を読めるようになったか	そう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う
	3	8	19	28	23
ピアノ授業理解度	理解できなかった	あまり理解できなかった	どちらともいえない	理解できた	よく理解できた
	5	2	4	36	34
ピアノの苦手意識の変化	変わらなかった	あまり変わらなかった	どちらともいえない	変わった	とても変わった
	5	10	33	25	7
ピアノ授業の満足度	満足ではない	あまり満足ではない	どちらともいえない	満足	とても満足
	2	4	8	20	46

理由として「普段の授業や児童への対応によってピアノを練習する時間がないと思うから」「ピアノが苦手なので、自分が弾けない曲はCDに頼り、その分子どもの近くで歌ったり幅広く活動できるようになるから」「ずっとCDを使うわけではなく、たまに忙しくてどうしようもないとき、練習ができなかったときに使

教育現場におけるピアノの実技の必要性についても回答を得た。CDを用いて授業を行いたいと思う学生が過半数を超える中、ピアノ実技は必要だと思うと答えた学生は約6割であった。実技が必要だと思うと答えた学生からは「発声練習ができたり、曲の一部分だけを練習するのに使ったりすると考えるから。CDだとできなかつたり、いちいち止めたり再生したり面倒だから」「子どもは楽器に興味を持つので、実際に演奏することで興味や関心を持ってもらいたいから」「本物の音に触れることができるから」「CDだとCD内でのアレンジしかないけど、ピアノだと伴奏のアレンジが効くから」「先生と子どもとの一体感を味わえるから」「子どもたちに生の楽器の音を聴かせることで、感性を刺激できると思ったから」といった回答があった。また、必要だとは思わないと答えた学生からは「間違えたら止まってしまうから」「ピアノに関する授業をする場合は、得意な人や専門の人を呼ぶといいと思うから」「CDのほうが自分のピアノより上手だから」というピアノ実技への苦手意識を思わせる傾向が見られた。

＜採用試験でピアノ実技の試験はある方が良いと思いますか＞

ある方が良い：30名 ない方が良い：57名

無回答：9名

実際に教育現場においてピアノの実技は必要であると答えた学生は過半数を超えており、それに伴う実技試験の必要性についても質問を設けた。実技試験がある方が良いと答えた学生の中には「子どもの前で弾くなら、試験でやってもいいと思うから」「その人の能力を確かめるため。音楽への関心度などが分かる」「緊張するので上手く弾けるか不安で嫌ではあるが、試験のためにたくさん練習して、より向上させようと頑張るから上達するし、人の前で弾く練習にはなると思うから」「仕事上、必要な技術だし、練習量が伝われば職への熱意も分かるから」「苦手でもやろうとする姿勢が大事だから」「ピアノの経験を保育に活かしたいと思っている人もいると思うから」といった回答があった。反対に、ない方が良いと答えた学生の中には「配属される学校によってピアノの弾く必要性があったりなかったりするから」「緊張して、本当は弾けるのにミスをしてしまう可能性があるから」「自信がないから」「受ける人が減る。その場だけのピアノ演奏で自分の実力を判断されているように感じるから」「できる人がすればいいと思う。強みを活かす教育現場であるべきだと思う」「得意不得意が大幅に広がるため、工作や読み聞かせなど、選択制ならあっても良いと思う」といった回答があった。

6. 分析及び考察

6.1 質問項目ごとによる考察

質問①～③のピアノ経験は、96人中51人が経験しているといった回答がある。初心者と経験者が約半数に分かれていることがわかる。経験者の中でどのくらいの期間習っていたかにおいては、3年以上と答えた学生が51人中34人と、突出している。1度習い始めれば長い期間継続し、クラシックや童謡、ポップスなど多くの曲に取り組んでいたことがわかった。取り組んで

きた曲の中には、教員養成大学でも課題曲とされる童謡やバイエルなども弾いてきている。経験者にとっては長い期間ピアノを弾いてきたことで、ピアノの弾き方や楽譜の読み方、指の使い方など、習ってきたことを大学の授業においても反映しやすい。反対に、初心者にとってはこのような経験がないため、経験者との差は必然的に存在する。

質問④～⑧の授業を受ける際の学生の実態であるが、ピアノの授業を履修した理由として「免許取得に必要であり、現場に出てからもピアノを弾く機会はあるから」といった回答があった。特に保育園・幼稚園現場においては歌うことも多く、ピアノ伴奏が必要になってくるため、ピアノを弾けなければならないといった意識が強い傾向にあることがわかる。授業においては極めて意欲的に取り組むことができおり、授業を履修したことで楽譜を読めるようになったと答えた学生も多い。しかし、難易度は難しいと答えている学生も多く、初心者にとっては右手と左手で違う動きをすることに慣れないことや、楽譜を読まなければいけないこと、また、音符の長さやコードの仕組みまでも理解しないといけないことから難しいと答える学生は多い。

その中でも質問⑨の授業理解度において理解できている学生は半数以上で、質問⑩の授業への満足度も高くなっている。初心者でも個別にレッスンを行うことで、学生それぞれの難しいと思う点について考え、細かく指導できるのは個別レッスンならではの点と考える。

6.2 1年次と2年次における授業意識の変化

ピアノの授業を履修した上での1年次と2年次での違いは分母が違うので比較しにくいだが、大きな変化はない。2年次においてのピアノの授業は必修ではないが、96人中81人が履修している。その理由として「続けて弾いておかないと指の感覚を忘れてしまいそうだから」「1年生で弾けるようになったのが嬉しくて、もっと弾けるようになりたいと思ったから」「コードや弾き歌いは将来絶対に役に立つから」といったポジ

ティブな言葉が並んだ。反対に、96人中15人は授業を履修しなかったとの回答が得られており、その理由として「ピアノの練習時間を確保できないから」「希望する自治体の採用試験に実技試験が行われていないから必要ないと思った」といった回答があった。

2年次の授業履修後においても、授業内容や理解度には満足しており、意欲的に取り組むこともできているが、苦手意識は克服できていない・どちらともいえないと答えた学生は多数存在している。1年次の授業を踏まえて、2年次においては難易度が上がったと答える学生も存在し、授業時間外の学習である予習復習の自主練習が必要であることを示唆している。

6.2.1 高評価順回答項目の分析

アンケート調査にて高評価（+1と+2）であったパラメータを分析し、1年次と2年次と比較した。評価はリッカートスケールの結果である、+1と+2を合算した数値である。

以下、図1・図2に示す。

最も高かった項目は「理解度」であり、1年次と2年次ともに高評価である。続いて「満足度」「意欲的」の順であり、読譜力と苦手意識の克服が見られた。読譜力においては、約3分の2の学生が身に付いたと回答している。楽譜を読むということはピアノを弾く上で必要不可欠な技術であり、基礎的な技術を授業内で習得することが可能であることが示唆された。

6.3 自由記述欄からの考察

アンケート調査による自由記述からもわかるように、ピアノ実技の技量はあった方が良くは越したことはない。学生生活のうちピアノの授業は2年間しかなく、授業内だけで習得できる技量は限られてしまう上に、現場に出て普段の業務をこなしていく中でピアノを練習する時間を確保する負担はあまりに大きい。ピアノ実技は、どこをゴールにするかによって取り組み方や曲への練習期間が大きく変わってくる。学生の場合、ミスなく綺麗に弾くことが目標ではなく、現場に応じた臨機応変な能力が必要であると考えられる。例えば

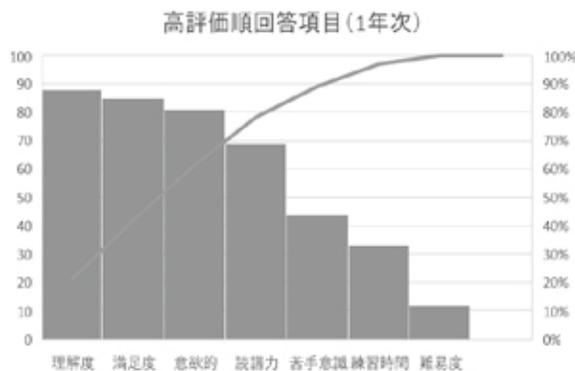


図1 高評価順回答項目（1年次）
Fig.1 In order of highest rating Response item (1st year)

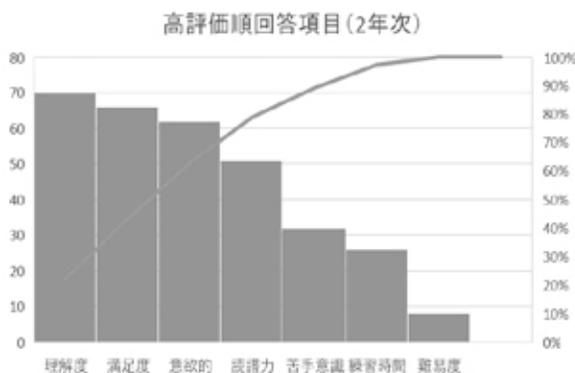


図2 高評価順回答項目（2年次）
Fig.2 In order of highest rating Response item (2nd year)

楽譜に書かれているコードでの伴奏をする際に、指定されたコードを理解して弾くことは最低限必要であり、そこから派生させてコードにリズムを付けて弾いたり、分散和音にして弾くなど、曲に合ったアレンジを取り入れることもできれば、曲の完成度を格段に上げることができる。たとえそれが弾いている途中に間違えたとしても、何事もなかったかのように演奏し、音楽の流れを止めないことも技量の1つに含まれると考える。さらにアンケート結果からは「自信がないから実技試験はないほうが良い」「伴奏用のCDを使いたい」といった回答も多くあった。

6.4 指導法考察

ピアノを弾くことが慣れていない学生にとって、自

信はどのように指導すれば身に付くであろうか。

まず必要なのは学生自身のモチベーションであると考える。授業で指導者に褒められる回数を増やしていけば、自分の演奏に対する不安は解消され、自信に繋がるだろう。そのために、学生それぞれに合ったレベルの曲を指導することや、楽譜通りの演奏が難しければコード伴奏を使用するなど、柔軟に対応していくことが一つの方法であると考えられる。人前で間違えずに弾く、ということを中心しがちであるが、それよりも表現をするといった方向へ音楽を導いていく方が重要である。技術的に間違えずに弾くということに意識を向けすぎると表現も硬くなり「音楽を楽しむ」ということを見失ってしまう。ピアノ演奏の技術的な問題点に気を付けるだけでなく、音楽を前に進めていくための表現力を高めていけば自然と間違いも少なくなり、自信に繋がっていくと考えられる。

また、学生一人ひとりに合わせてどの曲が弾けるか、どのような伴奏の形が合っているかなど、楽曲選びのできる指導者でないとピアノ実技の授業は成立しにくい。例えば、手の大きさによって指使いが変わるため、楽譜に書いてある指番号も誰もが弾いて弾きやすいとは言い難い。その場合、学生それぞれに合った指使いを柔軟に指導していかなければならない。コード伴奏を演奏することや、歌うことが得意といった学生の個性を生かし、良い部分を伸ばしていくことが必要である。

また、指導者の意識としても「厳しく教える」といった立場ではなく、学生と一緒に同じ目線で音楽を創り上げていくことが大切である。基礎的な技術のみを指導するのではなく、音楽的な内容、例えば曲の背景や歌詞の意味、テンポ感や曲の雰囲気を理解することでどういった表現で弾くことが適切であるかを一緒に考え、授業を進めていくことが重要であろう。その結果、学生に寄り添った授業ができ、学生それぞれのモチベーションを上げながら「ピアノが弾ける」といった自信に繋げていくことができるのではないかと考える。

7. おわりに

教育現場において音楽は情操教育の一環として欠かせない科目である。現在、保育・幼稚園、小学校現場では、音楽を聴き、歌うことは日常的に行われている。おはよう、おかえりなどの挨拶の歌や季節の歌、入園・入学、卒園・卒業などの行事の節目に子どもが歌って、先生がピアノ伴奏をするといった姿は日々見られる。その中で、ピアノ実技の技量のある程度理解をし、音楽を避けることなく子どもの心を育てることに繋げていくことが重要である。

アンケート結果からも、大学生活の中で積極的に授業に取り組み、地道な練習を積み重ねることで現場で必要なピアノ実技を習得することは可能であることが示唆された。ピアノ実技はすぐに習得できる技術ではないが、学生それぞれが真剣に取り組み、日々の練習を積み重ね、現場で必要な技術を身に付けていかなければならない。それを指導する者としても初心者、経験者に関係なく課題を見つけ、解決策と一緒に考え、教育現場において必要な技量を一人ひとりに合った方法で見つけていき、ピアノを弾くことへの抵抗を少しでも軽くしていかなければならないだろう。

利益相反の開示

本論文に関して、報告すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

本研究に際し、アンケートに同意し協力いただいたA大学児童学科の学生に謝意を表す。

注

[1] 令和3年雇用動向調査結果の概要 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/do_ukou/22-2/index.html

2023年11月30日17:38アクセス

[2] 教員不足に関する実態調査 令和4年1月 文部科学省(p.3)

[3] 保育士確保プラン 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000070943.html>

2023年9月1日13:01アクセス

- [4] 井上友里子 初等教育教員養成課程におけるピアノ初心者の指導法に関する一考察 ―指の感覚に意識を向けるトレーニング方法を用いて― 福岡教育大学紀要。第五分冊、芸術・保健体育・家政科編 72 pp.25-38、2023-03-10
- [5] 篠原友里 初等教育教員養成課程におけるピアノ学習支援に関する一考察 ―自主制作教材の活用を通して― 福岡教育大学紀要。第六分冊、教育実践研究編 71 pp.7-12、2022-03-10
- [6] 長谷川梨紗 教員養成課程の学生に対する小学校歌唱共通教材の弾き歌い指導の一考察：旋律の指づかいを中心に 京都女子大学教職支援センター研究紀要005（増刊号）、pp.165-174、2023-03-03
- [7] 竹内アンナ 小学校・幼稚園教員養成のためのピアノ指導法（1） 千葉敬愛短期大学紀要28号 pp.101-108 2016.3.31
- [8] 高久新吾 小学校音楽科における専科制度の提唱 ―日本とヨーロッパの小学校音楽教育の実例をもとに― 浜松学院大学研究論集（7） pp.61-73 2011.3
- [9] 長嶋礼 小学校音楽科の授業で必要とされる教師のピアノ技能に関する一考察 教育学論究編集委員会
- [編] 関西学院大学教育学会(9)-1 pp.45-52 2009-
- [10] [11] 令和3年度公立学校教員採用試験の実施方法のポイント 文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20220128-mxt_kyoikujinzai01-000020138-1.pdf
2023年11月30日17:44アクセス